



自然と共に生きる 森のくらしの郷 千年の森自然学校

北アルプスを眼前に望む大町市。「森のくらしの郷」と名付けられた手つかずの自然が残る広大な森のなかには、いくつものツリーハウスが点在している。運営するのは「千年の森自然学校」。懐深い自然や動物たちと向き合いながら、森と人との関係を学ぶ。



1: 300ha、東京ドーム約60個分という広大な森のなかにはいくつものツリーハウスが林立する。ここは6つのツリーハウスが並ぶ子どもの遊び場 2: 見学をさせてもらった静岡県富士市の家族のツリーハウス。築10年だが、大きな劣化は見られず、周囲もきちんと整備されている。ツリーハウスはホストツリーに大きな負担をかけるが、大切なのは周りの森をいかに手入れするかということ 3: ツリーハウスのコンセプトは、飾りや遊具ではなく、最低限の山暮らし。広すぎず便利すぎず、耐久性があって人の手で手入れが可能で、使わなくなったら自然に地に還ることが重要。固定はボルトではなく特殊なバンドで、樹の生長に合わせて5年に1度つけ直す 4: ツリーハウスの下は調理スペースとなっている。電気、ガス、水道はなく、近くの湧き水で水を汲み、枝を捨てて火をおこし、伐採した樹を薪にする。この森での大前提は「山火事を起こさないこと」で、基本的にルールはなく、自由に調理や遊びができる

ツリーハウスから森を整え、 家族や仲間の大切さを感じる

大町市街地を高瀬渓谷方面へ進み、槍ヶ岳に源を発する高瀬川を越えると、細い林道が見えて来る。その先に広がる「森のくらしの郷」には、長野県内外の家族が造ったさまざまなツリーハウスがいくつも建っている。木立のなかにそれを見つけたたびに、ワクワクとした気持ちが高鳴る。

この森は、従来の林業の枠を広げ、森林の価値を総合的に高めて保全していくことを目的とした場所。「千年の森自然学校」は、この手つかずの森のなかで自由に自然を楽しみながら、それぞれの家族が一人ひとりの役割を再認識し、生きる目的意識を取り戻すことを目標に、自然体験キャンプなどを中心として活動している団体だ。その取り組みのひとつが、家族で造るツリーハウス。2001年から開始し、広大な敷地内に現在は約30棟があるという。

ひとつのツリーハウスを見学させてもらった。静岡県富士市のご家族が週末を利用して約1年かけて建てたもので、毎日帰宅が遅いお父さんが週末は家族で遊べるようにと、お母さんと子どもたちが提案して造り始めたという。当初こそあまり乗り気ではなかったお父さんだが、気づけばもともと夢中になっていたとか。ツリーハウスは家族の団結を深めるだけでなく、大人の子どもの心をくすぐり、日頃



5: この森でもっとも多い1本樹六角形タイプのツリーハウス。カラマツ林の再生のために森に適したデザインから生まれ、雪や劣化、樹の生長などさまざまな条件に対応でき、軽くて造りやすい。室外は周囲できるベランダになっている 6: ソーラーパネルが設置された遊具で、センターエリアでは太陽光発電によって携帯電話の充電など最低限必要な電力は得ることができる 7: 宿泊ができるツリーハウスもある。室内は人の動きに合わせて揺れる構造で、すぐ近くには10m四方の大型のデッキがあり、イベントスペースとしても使われる 8: 六角形ではない2本樹型のツリーハウスは1本樹のものより安定性がある。全てのツリーハウスに使われているのは長野県産の間伐材で、南洋材や北米産のベニヤは使わない 9: センターエリア。大きな調理スペースがあり、ピザ釜や薫製釜も完備されている。ここでは会員制度が取られており、年会費はツリーハウスで2万円(ホストツリーの間借り代)、キャンプ8000円、1回限りのビジターは入郷料300円。ツリーハウスを見学する場合は2000円(要予約)となる 10: 各ツリーハウスには手製の階段があったり、ハンモックや遊具が吊るされていたりと、それぞれの持ち主によってさまざまな工夫が見られる。このツリーハウスでは量が敷かれていた

7		5	1		
10	8		6	4	3
	9				

の息抜きや癒しの効果もあるようだ。また子どもたちにとっては、自然のなかで多少の危険や気象条件の変化を身近に感じながら自立心を養い、自然の厳しさや、やさしさ、仲間と協力することの重要性を学んでいく。そして大切なのは、ツリーハウスを建てたあとの周辺の森の管理。間伐が必要でカラマツの人工林の木を1本間借りしているツリーハウスは、そのホストツリーと運命が共にあり、周りの樹の命とともに成り立っている。そのため、完成後も周囲の木を伐採し整備することで地面に光を入れ、さまざまな植物の生長とホストツリーの保護を促す必要がある。伐採にはルールはなく、自分の思うように木を切ることで森と光のバランスを学んでいく。樹の間借り代として支払う年間2万円の費用は、森全体の維

持費に当てられる。こうして森を管理することで、森と人が育み合う関係性を学ぶ。それがここでの暮らし方だ。

この森の所有者は、千葉県にある株式会社武蔵林業社社長・市川繁さん。「森のくらしの郷」提唱者で、「子どもの目を見開かせるためなら、山の木を切り倒してもいい」という。その考えに惹かれてこの地に来て「千年の森自然学校」を設立した朝重孝治さんは、「私たちは自分の何かを差し出してでも次世代の若者を育てて行かねばならない」と話す。自然を通じて、責任感の上で成り立つ自由を強く認識した子どもたちが、ここから旅立っていく。

建築学科の学生たちによる「きののはプロジェクト」

森のなかでひととき大きな建築中のツリーハウスがあった。武蔵野美術大学と早稲田大学の建築学科有志13

名から成る「きののはプロジェクト」が造る、2家族共用のツリーハウスだ。施主家族の知り合いである武蔵美建築学科2年の山内燿介さんが、天井と床だけ造られた段階で引き継ぎ、仲間を募って制作しているもので、通常六角形が主流のところ12角形3層構造という複雑な形になっている。

「最初は図面を起こしてもその構造がわからず、にかく試行錯誤の連続でした。施主からの条件は『光と風を通して掃除がしやすいこと』でしたが、住宅としては当然のことでも、ツリーハウスで造るとなると難しい。とホストツリーの耐久性の不安もありました。しかし制作が進むにつれ、樹への信頼度が高まり、今はやっと軌道に乗って来た段階です」と話す山内さん。制作中のツリーハウスに対して、朝重さんはアドバイスはするものの、手を加えたり指導はしない。一人ひとりが考え、学んでいくことを尊重している。



「千年の森自然学校」代表・朝重孝治（ともしげたかはる）さん。かつて東京の旅行会社で勤務し、ネパールやインドなど数々の国で現地の子どもの純粋さや学ぶ意思、働くことへの姿勢に心を打たれ、これを日本の子どもたちにも見せてやりたいと思うなかで「森のくらしの郷」市川繁さんと出会った。1999年から森のくらしの郷運営管理に携わり、2001年、有志により千年の森自然学校を設立。同団体のアドバイザー顧問として子どもキャンプ運営指導、指導者育成に取り組む。

